

ミャンマー—政権の移り 変わり、民主化、難民 問題

210781109 水野友乃

目次

はじめに

第1章 戦後から軍事政権へ

1節 ミャンマーの概要

2節 イギリス支配のビルマ

3節 独立とその後の現実

第2章 軍事政権

1節 1962年のクーデター

2節 1988年のクーデター

3節 1988年のクーデター後、2003年～2010年民主化のロード
マップ

目次

第3章 民主化

1 節 2010年総選挙と民主化

2 節 民政移管、独裁の終わり

3 節 国際社会の反応

第4章 2015年以降とロヒンギャ問題

1 節 2015年総選挙から2020年総選挙

2 節 2021年のクーデター

3 節 ロヒンギャ問題

はじめに

ア) バングラデシュの大統領が交代

a) ロヒンギヤの支援を表明

イ) 国勢調査が開始

a) 2025年に総選挙の実施計画

ウ) ミャンマー政権の最高権力者に逮捕状

a) 発行された場合→外交の展開が制約

→様々な動きがあるが現状の軍政が維持されると
予測

第1章 戦後から軍事政権へ

1 節 ミャンマーの概要

ア) 東南アジアの西に位置し、国土は676,600平方kmと日本の約1.8倍

イ) 人口は約5,114万人

ウ) 首都は中心に位置するネーピードー



1 節 ミャンマーの概要

エ) 公用語はビルマ語

a) 地域によってはビルマ語以外が共通語

オ) 多数派民族はビルマ人で7割。他にもカチン人、カイン人など公的には135民族

カ) 国内産業は未成熟で教員、医師、工業系の技師を目指す者や日本語を学習する者が多数

2節 イギリス支配のビルマ

ア) 植民地支配の目的

a) 収奪→強制的に奪取

i) 収奪の手段→微税と経済開発

b) 社会の支配：王族貴族→英人

2節 イギリス支配のビルマ

イ) 日本軍の侵攻

- a) 将来独立させることを目的
- b) ビルマほぼ全土を制圧
 - i) 中途半端な独立をビルマに付与
 - ii) アウンサンが国防大臣就任

2節 イギリス支配のビルマ

ウ) イギリス軍政復活

a) 1945年、日本の降伏後

b) 『ビルマ白書』発表

i) 戦後ビルマ政策の基本方針

ii) 社会・経済の建て直しが最優先

iii) 英連邦内のドミニオン化への準備

2節 イギリス支配のビルマ

エ) 1947年アウンサン=アトリー協定

a) ビルマとイギリスの会合

b) 独立かドミノン化の選択

オ) 独立の確定

a) 1947年11月5日、英国の下院での審査を経てビルマ独立法案が可決

3節 独立とその後の現実

ア) 1948年1月4日英国から独立

a) ビルマ連邦を正式名称

i) 大統領は象徴、実権は首相

b) 対外的に中立を宣言

i) 冷戦下の東西どちらにも非同盟

3節 独立とその後の現実

イ) 新興独立国は紛争に直面

a) 1948年ビルマ共産党（BCP）が武装蜂起

b) 1949年カレン民族同盟（KNU）も蜂起

c) 中国国民党軍（KMT）の残党が侵入

i) ビルマは正面から戦闘→大敗

ii) ビルマ国軍は国防計画の再検討

第2章 軍事政權

1 節 1962年のクーデター

ア) 原因

- a) 仏教の国教化による少数民族問題が悪化
- b) 与党の分裂→国内の分裂回避、国家の独立保持

1 節 1962年のクーデター

イ) 結果

a) 国軍が国家の全権を掌握→革命評議会が設立

b) 軍事政権は独自の社会主義路線を採択

i) ビルマ社会主義計画党 (BSPP) を設立→12年にわたって軍政が継続

2節 1988年のクーデター

ア) 原因

a) 供出制度、廃化措置など、社会主義経済の失敗に対する不満→デモに発展、民主化運動

b) 学生を中心とした反ネーウィン運動

2節 1988年のクーデター

イ) 結果

- a) 軍幹部19名からなる国家法秩序回復評議会 (S L O R C) を結成→国家全権を掌握
- b) 学生が反政府運動→デモに発展

3 節 1988年のクーデター後、2003年～2010年民主化のロードマップ

ア) クーデター後

- a) 学生・市民は反クーデターの意思表示
 - i) 道路閉鎖、デモ行進
 - ii) 国軍は発砲という強硬手段
- b) 軍政対学生連盟・政党、国民民主連盟 (NLD)

3節 1988年のクーデター後、2003年～2010年民主化のロードマップ

イ) 民主化へ向けての7段階のロードマップ

a) 国家平和発展協議会 (SPDC)

i) 内外の批判をかわす目的

ii) 制憲国民会議の再開、民主的国家実現への道筋が提示

b) 制憲移譲に関する考え方と同意

第3章 民主化

1 節 2010年総選挙と民主化

ア) 2010年総選挙

- a) 20年ぶり2度目の総選挙
- b) 国民民主連盟（NLD）のボイコット
 - i) 新憲法への不満
- c) 軍政が支持する連邦団結発展党（USPD）が圧勝
 - i) 民主化政党、軍政寄りの国民統一党が不正があったと不服の意思表示

1 節 2010年総選挙と民主化

イ) アウンサンスーチーの政治活動

a) 自宅軟禁から解放後、少数民族政党と会談→軍政との対話を目標とし、国民会議を創設することで合意

b) 直接対話による問題の解決を主張→実現

c) 2012年の補欠選挙で当選→人民院議員として活動

2 節 民政移管、独裁の終わり

ア) 民政移管

a) 軍事政権から文民政権への移行

b) 民主化とは異

イ) 軍政は民主化勢力との対話を進める姿勢

ウ) 2012年の補欠選挙で当選したアウンサン
スーチーが政治家へと変貌

a) 国政参加が民主化改革のひとつの展開点

3 節 国際社会の反応

ア) 東南アジア諸国連合 (A S E A N)

a) 好意的→2014年 A S E A N 議長国就任

b) ビルマ問題を外部の介入ではなく、A S E A N の努力で解決したいという意思

イ) 米国

a) 経済制裁を継続しつつも、話し合いは行う柔軟な対応

3 節 国際社会の反応

ウ) ヨーロッパ連合 (EU)

a) ビルマ政府の変化を評価

b) 武器禁輸を除くすべての制裁措置を1年間停止→その後、完全停止

第4章 2015年以降とロヒンギヤ 問題



1 節 2015年総選挙から2020年 総選挙

ア) 2015年総選挙

a) 民政下初の総選挙

b) 民主主義がミャンマーに定着

イ) アウンサンスーチー政権

a) 夫が外国籍→大統領就任が不可能

b) 古くからの友人を大統領に→実質的に実権を掌握

1 節 2015年総選挙から2020年 総選挙

ウ) 2020年総選挙

- a) アウンサンスーチー側の圧勝
- b) アウンサンスーチー人気が増加

2節 2021年のクーデター

ア) 原因

- a) 国家観の相違
 - i) 軍：国土の防衛、スーチー：民主化
- b) 2020年総選挙でNLDの勝利
 - i) 軍の権益を標的とする政権
 - ii) 軍政に復活の目が消滅
- c) 不正総選挙疑惑

2節 2021年のクーデター

イ) 結果

- a) ポスト・スーチー時代の到来
- b) 市民への弾圧により軍はさらに劣勢

3節 ロヒンギヤ問題

ア) ロヒンギヤ

a) ミャンマー西部のラカイン州に住むイスラーム教徒が自ら名乗っている呼称

b) 不法民族として、法的に外国人

イ) ミャンマー国境警備隊と衝突

a) ロヒンギヤが監視所を襲撃→互いに死者

b) 軍がロヒンギヤを拘束→バングラデシュへ避難

3 節 ロヒンギヤ問題

ウ) バングラデシュの対応

a) 非正規の一時入国者として対応

- i) 政府が難民に関する法律を非保持
- ii) 国際法で定められた保護を非容認

エ) 国連

a) 先住民族ではないと明記

b) 民族浄化と明記

- i) ミャンマーは不信感

終章 今後の展望

ア) 中国とASEANが解決に導く

a) 「5項目の合意」

b) 軍政に対して民主化を促進

イ) 日本が支援をし解決へ導く

a) 人道支援→受け入れ制度の改革

b) 軍最高司令官との接触が可能

終章 今後の展望

ウ) 中国、ASEANが導く考え方に賛成

a) 「5項目の合意」という具体的な措置

b) ASEAN各国がクーデターを批判

c) 物理的な距離が近くアプローチが安易

d) 軍最高司令官と接触できる人物を活用不可能状態